

兵庫県現代詩協会 会報42号 2017年12月15日 発行たかとう匡子

◇二〇一七年度「詩のフェスタひょうご」盛会のうちに終わる(報告)

第一部講演会・講師 平田俊子氏／第二部朗読会

一〇月八日(日)ラッセホール・リリーの間において、一三時三〇分より「二〇一七年・詩のフェスタひょうご」のイベントが行われた。

定刻どおりに、司会の時里二郎副会長より開会が告げられ、たかとう匡子会長が開会の挨拶を述べた。今年には講師に東京から平田俊子さんをお招きして「詩を書く時間―言葉をこころがす、言葉につまづく」という演題でお話していただいた。(講演要旨の詳しくは別ページ参照)平田さんは関西に在住されたこともあり、講演は自然と関西弁のイントネーションとなり、心地よかった。言葉はその地に根づいて生きていて、よい意味で、それぞれの言葉の特色となっている。自作詩をたくさん朗読してください、平田さんの詩の特徴もよくわかった。佐多稲子の小説『キャラメル工場から』の舞台になったキャラメル工場は、現在も化粧品会社として存続しており、購入された化粧水の入っていたガラス瓶を大事そうに見せて下さった。九〇分の講演はあっという間に終わり、会場からの質問を受けた。平田さんは子どもの詩の選考もなさっているの、それに関する質問も。子どものころから、男女の差を意識するもの、作品についてはどうかなど、新しい見解を問われる質問だった。平田さんは新しい男女の価値観に準じてお答えになった。参加者数もこれまでになく多く、会場は詩の熱気につつまれた。

第二部は司会の北野和博により朗読会が行われた。朗読会は、参加者(当日体調不良で二名不参加)がそれぞれの詩の世界を繰り広げた。耳から聴く詩の良さを感じる朗読会だった。参加者名/秋野光子・イチゴミルク・一瀉千里・香山雅代・加納由将・為平澤・ナイロンキヤムハム・名古きよえ・中嶋康雄・永井ますみ・中尾彰秀・野田かおり・藤井雅人・朴明子・山本純子・山本真弓・山口芳徳・矢野美佐子(敬称略)。朴明子さんはチャマチョゴリに着替えて朗読をした。兵庫県以外からは、和歌山、大阪、岡山、京都など広範囲からの参加だった。

終わりの挨拶を事務局の神田さよが行い、予定時刻の一六時三〇分に終了した。その後、ビストロウエシマに会場を移し懇親会を行った。また、二次会はカルメンで行い、平田さんも最後までお付き合いくださいました。詩のフェスタひょうご参加者・八八名/懇親会参加者・二七名。

(報告・神田 さよ)



写真上下・朗読会での参加者の朗読



写真下・会場光景

第7回 Poem & Art Collection

会期2018年1月16日(火)~23日(火)15時まで

期間中 平日10時~17時(土・日は9時から17時)

会場 神戸文学館・休館日17日(水)

—内容—

☆ポエム&アートコレクション・会員による詩・アート作品(絵画・オブジェ・書・写真・色紙等)の展示

・参加者 阿部由子、大西隆志、大橋愛由等、和比古、香山雅代、佐藤勝太、高谷和幸、玉井洋子、玉川侑香、永井ますみ、中島友子、西海ゆう子、坂東里美、福永祥子、牧田榮子、松下玲子、丸田礼子、水こし町子、望月逸子、山本真弓、由良佐知子

☆兵庫・詩の現在展(会員の詩集・詩誌の展示) ※本年度も多くの優れた詩集・作品集が出版されています。

☆特別交流イベント(2018年1月20日土曜日14時~)講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る vol. 5」

※たかとう匡子が竹中郁について講演します。竹中郁(1904~1982)の名前はよく知られていますが、どのような詩作をし、どのような活動をし、どのような生涯を過ごしたのか、案外知られていないのではないのでしょうか。竹中郁の詩と詩人を検証しようという講演です。今年度は講演の時間が短いという声が寄せられましたので、講演会のみとします。

(丸田 礼子/和比古)

◇平田俊子さん講演会 演題『詩を書く時間—言葉をころがす、 言葉につまずく』 講演趣旨

司会者の時里二郎さんが「プロフィールの紹介、興味深い話が聞かれるでしょう。ことばのシャワーを浴びてください」と話された。次に実行委員会会長たかとう匡子さんから、「平田俊子さんの詩は、内的描写力に仕掛けがある。日常にあると思ひ読んでいると詩の作品として読んでしまう。ブラックユーモア・仕掛けがある。作品としての作者と詩の主人公とは違う。その仕掛けを見破ってもらったら」と話でいよいよ平田俊子さんの登壇である。手にはなぜか小さな透明な瓶を持っている。軽やかな声で話が始めた。「神戸入りは久しぶりだがほっとする」と神戸人の心に入ってきた。京都に十一年、その他六年関西で暮らしたことで関東（東京）との違いから話が始めた。例えば、東京では食事では最後に必ず一つ残す。関西は最後まで食べる。食べないままにすることで遠慮の心を表現しているようだ。また「くかしら？」「じゃん」「なのね」と男の人でもいう。西と東の分厚い壁がある。関東では、関西で通じていた冗談も通じない。

そこで、尼崎の園田に住んでいたが大坂を西として過去をネタにした『(お)もろい夫婦』が朗読された。音の響きや言葉に引きずられていく。言葉がどんどん変質いく感覚である。ご主人は岐阜県で中部地方だが東側にした。作品化をするためには、西側、東側で多少フィクションしながら敢えて変えていく。詩をおもしろくするために必要である。創作はフィクションを混じえる。漫才風であったり、東京への反発であったり「いかにも詩でございます」への反発である。平田さんは、どんな苦しい生活の中でも「詩を書くことは手放さず没頭してしゃんとしていた」と話す。悲しいとか寂しいとかをテーマにして書いたらと、思潮社から進められたけどありきたりなことは書きたくなかった。そこで、尼崎（あまがさき）を雨傘期（あまがさ

き）として墓でのくらしを詩にした。字を変えると普通の「尼アマ」を雨傘期にすることで新しいイメージを作る。ことばをころがす↓ことばをころす。「が」だけ取っただけで違ってくる。この詩は父が死んでいるが、実際には死んでいない。「夜ごと太る女」↓まさに太る。タイトルにも気をつけている。

関西弁方言はよその国のようで聞いて楽しい。関西でないかわからない言葉がある。関西にいたとき「自分は何？」と友人に言われて「わたしのこと？」と戸惑ったことがある。関西でないかわからない。よそのものだから、詩にすることやしゃべることが難しかったおかげで関西弁の詩を書きたくなった。『戯れ言の自由』の「あかん」はことばが捕りついた物を書き取ろうとして詩になった。

四人の作家を例に上げて、その土地土地の言葉（会話）に注目していくとよく分かる。まず、幸田文の随筆「秋の電話」では、東京の山の手の雰囲気を感じられる。日本語の品のいい会話がやわらかで心が温かくなってくる。また、同じ東京でも沢村貞子の「わたしの浅草」に出てくる「あたりみかん」という言葉から、下町の人情があり浅草の元気で威勢のいい会話がある。林芙美子の「風琴と魚の町」の母と娘の言い合いは門司の方言の良さが出ている。そして、登壇した時に持っていた小さな瓶は次の佐多稲子の小説『キャラメル工場から』に出てくる化粧品の瓶だった。長崎から出てきているのに父と娘の会話に長崎の方言は使っていない。それではリアルでない。もっと方言を使っていたらイメージが変わっただろう。

会話には心と心のやり取りがある。それを詩の中に取り入れていくことを知った。平田さんの詩の出発点は、草野心平の「秋の夜の会話」である。会話が詩になる。詩は誰かに向かって書いている。

詩は難しいが、なものにも替えがたい時間である。「いつでもやめてやらあ」と思ったが、止められない。どこまでいけるか。一作一作新しい試みをして見極めるため書いていくだろう。

明るく強くそして楽しく話されてから、最後に「犬の年」を朗読された。笑える詩は下品で軽く見られる。しかし、詩らしい詩ばかりでなく軽く思われるようだが捨くれ意識と思われるようなのを書いてみた。孤立を恐れたいけない。同人・現代詩人会も一切入っていない。ひとりで細々とやっていると締めくくった。

その後は、質問に楽しく答えてくださった。心に残った言葉として「日本語の言葉の豊かさを会話にとり入れることで難解さから防御できる」「落語が好きで見ていると日本語をころがす、ふみはずす、アクセントがある。それを詩の中に入れる。現実を書く」「隠岐島に育ったが後ろ暗さを笑いで転化したのかもしれない」また、「文字変換から詩が構築されている。それは、言葉を並び替える。言葉遊びをしている」と話された。

言葉をころがすとは、言葉と遊び、音の響きに耳を傾け、言葉に引きずられてどんどん変質いく感覚を味わうということだろう。

詩集『戯れ言の自由』をはじめ、言葉遊び的な詩を得意とする。意外な言葉どうしのぶつかり合いを楽しみながら、会話や方言を取り入れることで人情や暮らしまでイメージする。素朴な中から詩を紡ぐ手法に会場のみんなどは感銘を受けた。楽しく詩を書く、詩はしかめっ面して問うものばかりではない。もっと楽しいものだ。詩作そのものの喜びを率直に記すということ話を話された。朗読あり笑いあり示唆にとんだ話ありで、あつという間に時間が過ぎた。

（森田 美千代）



「2017 詩のフェスタひょうご」の講演で、自著の詩集『(お)もろい夫婦』を手にして楽しく話される平田俊子氏。

第5回 文学紀行 《須磨寺と周辺の散策を楽しむ》

これまでのバス旅行ではなく、源平の古戦場跡や、子規、芭蕉、蕪村の碑、山本周五郎の須磨寺在住当時の初期作品などを偲びながら、ゆっくり散策する文学散歩です。会員の方も、会員以外の方もどうぞふってご参加ください。

2018年3月18日(日) 雨天決行

◎集合 10時30分 山陽電鉄須磨寺駅改札口

◎会費 2,000円(花月での昼食代)花月:以前迎賓館でしたが、現在は趣きのある料理旅館となっています。

◎ナビゲーター・たかとう匡子

※行程※

- ⇒須磨寺(エレベーター有)見学。軟盛首洗いの池・義経腰掛けの松等
- ⇒碑/山本周五郎・良寛・与謝蕪村・伊丹三樹彦等多数。宝物館見学(無料)
- ⇒山陽電車で須磨浦公園駅へ移動(運賃は各個人負担)
- ※須磨観光レストハウス花月にて [昼食] 12時頃～
- ※食事後、坂を下りながら子規や虚子の碑などを見学
- ⇒須磨浦公園駅にて解散 14時30分頃

◎参加申し込み 42号会報に同封の葉書【私製】に切手を貼って申込をしてください。

(注意) 料理内容 肉か魚を選んで記入。

※締め切り 3月10日(土)

◇現代詩セミナー in 神戸2017・報告 倉田比羽子講演 「輝け女性詩 新しい戦慄を求めて」

神戸女子大教育センター10・28

秋も深まる神戸に、倉田比羽子さんをお招きし恒例のセミナーが開催された。日本の現代詩を牽引するグループの先端で活動する女性のなかでも魅惑的な個性でその存在が際立つ詩人である。セミナーの案内文には、たかとう匡子『私の女性詩人ノート』を手掛かりに、今、詩が問われる言葉の危機を検証するとあり、その本では現代の時代空間にがっぷり組み合う詩人が登場し、倉田比羽子は気鋭のひとりである。要点は次の2点であろう。

1、戦後の時代認識と戦後詩史

なかでも戦後現代詩における「女性詩」という実態、その位置と作品の内実の考察がはじまるとして性や生活を「ことば」によってのみ可能な詩」をどう社会的に位置づけるかの流れがみてとれ、新井豊美の「自分自身であるために、自分のことばをさがさなくてはならない」とのことばが今にも通じる指針のように新鮮である。

2、詩とはことばを基底として、(女性的なもの)詩である

人間言語としてのことばの裂け目をゆるがしながら、「女性詩」の総体の名を巻き込んだことば(語法)と「詩的表現」の定立根拠について。

耳慣れない言葉や用語、単語も、会場で配られた資料をみながら聴くと理解しやすく、現代詩のながれも明解で、一時間を短く感じた。

その後講演を受けて倉田比羽子を中心に、また手掛かりになった本の著者たかとう匡子や彦坂美喜子、堀本吟、富上芳秀、会場の積極的な参加も得てのシンポジウムとなった。それぞれの活動をとおしての真摯な発言は、ことば、詩にこだわり向き合う者の課題としても発せられ、ゆきつ戻りつ終わりのない刺激的な中

に永遠を内包し盛況であった。倉田比羽子の作品にある余白を今回発見した感があり、現代詩の懐の深さと魅力を思った。

(牧田 榮子)

◇予告

ポエム&アートコレクション展の特別交流イベント2018年1月20日(土) 14時~15時30分。神戸文学館での「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」シリーズ。足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久につづく第五回目。たかとう匡子さんによる講演。タイトルは「竹中郁、神戸という風土が生んだモダニズム詩人」。主催は神戸文学館・兵庫県現代詩協会。後援は日本現代詩人会・半どんの会。

竹中郁は1904(明治37)年兵庫区永沢町で生まれた。1928(昭和3)年、エスプリ・ヌーヴォを標榜した「詩と詩論」に創刊から参加、そこでみずからの詩風を確立するかわら、のちには三好達治、中原中也、立原道造、杉山平一ら「四季」にも参加。同じ関西出身の安西冬衛のモダニズムとは一風ちがう人なつこい作風を深めていった。

ともあれモダニズムとは一般には言語感覚、言葉のセンスを重んじ、言葉を絵のばあいの絵の具や、音楽のばあいの音と同じ位置でとらえるものと考えられている。その点、竹中郁のモダニズムは神戸独特のハイカラな家に育ちながら、五人の子どもにも恵まれ、家庭を大切に、単に言語美の追求だけでもない日常性の分野、抒情詩の領域を深く自分の詩に溶かし込んでいった。戦前の詩集『童骨』から戦後の詩集『動物磁気』へと作品数も多く、また児童詩「きりん」の仕事のあとの詩集『そのほか』などにはさらなる変貌があり、その軌跡も見えていきたい。

最近注目されている児童詩誌「きりん」を井上靖と一緒に創刊監修、児童たちの詩の育成、市立入江小学校や県立兵庫高等学校などの校歌や近鉄パファローの歌などたくさん書いたことで広く知られる竹中郁の、その詩と詩人を検証する。

連詩 神戸・秋というタイトルに寄せて

虚数の秋

ひっそりと隠れた数式がある

そこに姿はないが数は存在する

何も語らない沈黙の方程式

何も見えない美しい風景詩

(大賀二郎)

公孫樹の葉が

ハラハラハラハラと落ちてきて

子どもの頃ぼくらは銀杏の実を拾った

あの並木道はまだあるだろうか

六甲の山並みと港が見渡せるあの道は(たかはらおさむ)

どこか異国を思わせる通り
海風に揺られているブラウス
ブティックは多国籍のものであふれ

港には光り合う白い船

波がたくましい復興を奏でている

(中川道子)

六甲の山並みが騒ぎだし

神戸港がさざめく頃

街も山も茜色に覆われ

人々の乾いた足取りが

平和な街を闊歩していた

(佐藤勝太)

私たちはどういふ世界で生きているの
戦争と平和が浸潤しあい
愛と不倫が絡まりあい

親が親でなく子が子でない

コスモスが咲き乱れているのに

(西村好子)

どんなことが生じようが

ひるまないで

空を見ているのだ

秋は

きれいな雲が流れる

(宮川守)

過ぎて行くものが
新たな到来と喪失を見せる

信じるか 信じないか

ひとには それぞれの季節が在っても

生きることは矢張り素晴らし

故郷の秋祭り

幟とお囃子

境内の子ども相撲

実りが詰まった重箱

その日に生まれた

(岩崎英世)

涼しくなったので

牛乳を すこし あたためて

お皿に入れたら

こんな美味しい牛乳ははじめてだ

野良猫が 言う

(水こし町子)

広いまっすぐに伸びた街道

西へ大きな陽が落ちる

車も人も一瞬動きを止める

こちらをひたと見ている影

(永井ますみ)

さびしいときは いつでも おいで

泣きたいときは いつでも 来い

この街は コオロギも鳴かぬ

星もほとんど見えぬ それでも来て

思いのたけを しゃべっておくれ

(三宅武)

姉と暮らす日々は

真珠の宝石よりも美しい

生の「女性」を慕う

幼い頃からの

弟の愛である

(豊原清明)

(ま〜や、ま〜やあ) : 背丈ほどの草に囲まれた駅

山はそこに降り立ち 空色の電車はためらいながら

刹那に過ぎる 誰も降りず 誰も乗らない駅 摩耶

坂道を駆け下りてきた 白いスカートの人は居ない

私は風となり 改札を抜け 草叢に忍び 君を捜す

(渡辺信雄)

「そして…」と

伝言が受け継がれて

少女は

曼珠沙華で彩られた畦道を

一途に駆けて行った

(小西誠)

地下鉄の駅を降りて

大きな池

水草が繁茂し

木々が囲み

秋らしくない秋

(田中信爾)

風はきゆるきゆる旅をして

雨は海まで行けません

傘は川面できんとくどくど

残った残像は

二つか一つか分かりません

(張華)

播磨灘に日が沈む

誰もいない海岸で日の沈む音を私は聴いた

橋を潜り抜けた巨船が逆光の中に消える

対岸の淡路島を暗紫色の暮色が沈み

秋の日の釣瓶落しに今日が死ぬ

(藤井清)

空に迷い出たかもめが

風に逆らう木の葉のように

大海原

たった一羽で

堪えている

(井口幻太郎)

連詩もどき

会報担当の大西さんから依頼を受けて、現代詩神戸の皆さんの五行詩を私が編集して一面を埋めてみました。要請を受けて快く書いて下さったお仲間の皆さまありがとうございます。いつもの詩とは違う雰囲気のある作品もあって、楽しく作業させていただきました。

(永井ますみ)

矢向季子のこと(続)

季村 敏夫

矢向季子の作品が新たに四篇見つかった。初出誌は『日本詩』(昭和十年四月号・アキラ書房)。

禁断の果実

花模様の窓掛は重く垂れてゐた
ガストروبに相向へる手と手
赫あかと燃えあがる情火よ

灰白くたちこめる乱れた思念の髪を

臉と臉の内側で小気味よくぢりぢりと前へをしやる
あゝ罪と罰 何するものぞ!

瞬間 見事にこの部屋の悒鬱をはね飛ばし
ふくよかな果実に熱い唇が初めて合つた時
あのひとはづんだ息づかいひが
あたしの乳房のなかに切なく抱かれてゐた

あのひとは有頂天に嘆美した
たゞ思ひのままの恍惚を貪り
歓喜にうちをのいてゐた
そして徐ろに人生第一義の真理を肯定し
更に声を呑んで歎賞した

青い貝殻

私はあたしから離れよう
ピアノをぬけだすミュウズのやうに
時刻といつしよに地球の外へ滑り落ちる
そして燦めく青い絨毯のなかにゐる

あたしの下髪は
蠟のやうに消えるであらうに

白汀に 私の影らしいあたしが倒れてゐる
睫毛に 何らの悔もなく
林檎の影を匂はせてゐた
全身露のやうに光りながら
唇は塩っぱい更な生みを始める
青い貝殻を真似て
それが 幸であらうと 不幸であらうと

春日

青い竹垣をめぐらせた芝生に腰を下してゐると
春陽が頬をほてらせる

向うの家の古風なオルガンの曲に合せて
考へてゐると音楽が止んだ

部屋に急ぎ帰って 楽器を手にすると
あたしは雀躍した
トレモロの余韻が小鳥達の胸にいつばい刺繍されて
ある
それを見つけて縁側を降りてゆく
あたしの足音が樹の幹にとどかないうちに飛び去つ
て仕舞ふ

空間で崩れるパイプの煙 環のやうに
―あまり午前中の空気が静かなので

正午

編んだやうな樹の枝のあちこちに

明るい空気が揺曳してゐる

正午がまるい影をつくる

お婆あさまが動かなくなつてしまふ
一步地球を離れたすがたをして
影は静かに横にたちのく
眼をさませまい用心して

敗戦後の詩誌『航海表』に内田季子の作品がある。
内田豊清に近い人だと思ふがわからない。矢向季子は
同一人物か、内田のエッセイに矢向季子が出て来る。所
々官能的な記述があり、想像力は妙にくすぐられる。

●詩誌は古書蒐集で知った高森大作さんが送ってくれ
た。矢向季子、忘れられた詩人、彼女の詩集、何とか
して上梓したい。



※兵庫県現代詩協会会報上で、この「矢向季子のこと」も含め、竹中郁周辺のことを書かれた季村敏夫さんの連載文の一部が、「1920年代、一冊の詩集もなく突如行方不明になつた詩人を中心にしたアンソロジー集」として出版が予定されている。タイトルは『モダニズム詩篇番外篇―稲垣足穂と竹中郁周辺(思潮社)で、2018年初夏に上梓されるようだ。貴重な書籍の出現が楽しみでもある。(記・大西隆志)

会員の詩集評

時里 二郎

田中信爾『Songs』（竹林館）。英語の30の単語に詩を添え、田中さんの絵も扉の絵を含めて15枚挿まれた詩画集だ。前詩集『音の変幻』は写真詩集だった。例えば、『Radish』という作品は、「(ハツカ)ダイコン」の意味である。また、その食用根は辛味があり通例生食。長根のダイコンの意味もある。日本の大根とほぼ同じようなものと想像される。米学生俗。ちえつ。がつくり。花言葉はないようだ。ラテン語に発する古い言葉。覚え書き風の簡素な走り書き。ほかの作品も、素っ気ないほど淡々と言葉が記述される。それに比べると、絵のほうは素朴で力強いタッチで、こちらはあふれるほどの詩情がある。そのギャップは面白いが、詩(言葉)の方は、発想の切り口にもっと変化や遊びがあったほうがいいのでは。

瑞木よう『桜の空』（竹林館）は第四詩集。瑞木さんの詩の言葉の特徴は、なんととっても自らの心に言葉を溶け込ませていくことに心を砕いているところ。そこにおのずと音楽が生まれる。シベリウスやフオーレの名がでてくるが、「音楽」は瑞木さんの詩の大切な柱だ。彼女の詩は、とても小さなこと、なんでもないことなだけけれど、何か言葉にはできない思いが心にあつて、それを心のなかに見つけるのではなく、丁寧に景物の世界を言葉で描くことで、それを確かめている。そんな作品に印象深いものが多い。

「五月 道は赤い実の果汁で染まり／種が 足裏に痛い／芽吹くのか 乾いて終わるのか／柔らかい土に落ちたものは／硬い石畳に 落ちたものは／鳥が実を啄む／嘴の先は 固くとがり／人が 口に含む／指を赤く染めて／猫が踏む／柔らかい足裏で／立ち尽くす足の下には／生まれなかつた種たちが／幾層にも 積み重なって／赤い果汁を するしのように／流し続けて 足を沈める」(「桜の道」後半部)

植村孝『水の化学者になると』（私家本）。植村さんの作品は『詩人の事件簿』や『エラー表示の男から』など、型破りな詩が持ち味だが、今度の詩集は「型破り」ではない。植村さんの詩のスタイルが、これまで

以上に生き生きとした姿を見せている。もとよりアイロニーを滲ませた批評精神と、醒めた自己認識、それに本音を隠さない捨て身の体で生きてきた植村さんの人生そのものが、言葉に乗り移ったかのようだ。「余白だけの人生」を引く。「もうこの年になると／空白のページはすべて書き込まれて／文字がぎっしり詰まっている／もう書く余地がない／あと残っているのは余白だけ／(略)／余白だけはきれいな字で／格好いい言葉で／小さな字で／出来るだけ多くのことを書いていきたい／もう余白だけしか私には残っていないのだから／余白に沢山の字と言葉を／これでもか これでもか／と言うくらい書き込みたい」

鈴木賀恵『ムーブメント―花―』（編集工房ノア）。第五詩集になる。鈴木さんは耳のいい詩人だ。発語する言葉をあれこれと吟味しなくても、零れてくる言葉はおのずと音楽を呼吸している。どちらかと言えば室内楽。言葉に余計な飾りがないのに、それでいて豊かにものを包み込む余情の深さがある。また、きりつとした言葉の裁ち方も鈴木さんの詩の魅力だ。そんな一編を引く。

「わたし／背中に螺子が欲しい／機械が少し ゆるんできたので／きりりと巻いてみたい／でも背中では自分でまわせないから／左の手首の内側につけよう／きりきり捲いて／胸ポケットにしまっておく／時々びかびかに磨いて／きりきりつと捲いて／左のポケットに」(「螺子」)

今村欣史『触媒のうた』（神戸新聞総合出版センター）は、副題に「宮崎修二郎翁の文学史秘話」とある。博覧強記の人であり、兵庫県のみならず、日本近代文学の「生き字引」と称される宮崎修二郎氏と長く交流のある今村さんが、宮崎氏の語った文学談義をもとに筆を執つたもの。ともかく抜群におもしろい。思わず身をのりだして読んだ。なにより今村さんの話術、語りの妙。難しい言葉や言い回しは避けて、心を尽くして宮崎氏の大切な業績を知らしめることに専念していること。また、多くの資料にあたり、現地にも足を運んで話題の裏付けをしっかりとつてから語られていることとは、読めばすぐわかる。もう一つ付け加えれば、一つの話が一直線に進むのではなく、幾つもの寄り道や脱線を取らずに語っているところも、話の興味をふく

らましていく工夫だ。なお、タイトルの「触媒」とは化学用語だが、自らは功名を求めず、「自己宣伝」はいっさいせずに、もっぱら「世のため、人のため」を考えて生きてこられた宮崎氏の黒衣的な生きざまを表したものとのこと。「のじぎく文庫」の創設や、柳田国男の「故郷七十年」の話、そして「足立巻一先生」と「富田碎花翁」の章など、多くの文学者や文化人と宮崎氏の交流が語られていて興味が尽きない。後ろには人名索引も付されているのも親切でいい。兵庫県文学に携わる者には必読の書と言えらるだろう。

関はるみ『黒き猫』（コントラルト文庫）。「立原道造「郵便切手をしやれたものに考へだす」にならつて」と題に添えてある。自分宛に届いた手紙に貼つてある切手から紡ぎ出したエッセイ集である。このエッセイ集を編集し、冊子状の書物に仕立て上げた坂東里美さんが「解説」を添えている。曰く「大切な人に出す便りには、切手にも思いが込められている。届いた便りに貼られた切手から、その思いを受け止めて、切手からしやれた物語を考え出すこともまた、便りをくれた人に対する愛情だろう。」とある。

例えば冒頭の一編は、久隅守景の納涼図の切手。「夕顔の蔓を這わせた高い棚の下に、ゴザを広げて父親が浴衣姿で寛ぐ。右手は頬杖で横向きに寝そべっている。父の背後には幼い男の子が座っている。投げ出した父の足先に母親が豊かな黒髪を腰のあたり迄散らして、上半身は裸の横座り、湯上がりだらうか、人目など気にかけない。ゆつたりと時が流れる夕涼みは、何とも羨ましい情景だ。(略)」

納涼図を説明しているのだが、無駄がなく、絵の勘所を的確について描写している達意の文章にまず驚く。このあと、夕涼みの風情を自分に置き換えて、現代の風情のない都市の情緒を揶揄している部分も面白いのだが、この便りをくれたのが男であることが明らかされ、その意図をおしはかるといっておしまいのひねりがまたいい。

野口幸雄『妻が出かけた日』（濠標）は第一詩集。公務員を定年退職したのをきっかけに詩作を始めたという。「あとのまつり」を三行目から引用してみる。

「あの時 ああ言えばよかった／この時 こうすればよかった／と 自分の馬鹿さ加減にウンザリします

／でも一度だけ／うまくいった事があります／手に汗握り 緊張しながら言ったんです／「俺と結婚してください」／それで今日結婚記念日です／妻がいきました／「あなた 何回目か覚えてる？」／俺が答えます／「三十何回忌だ」／「デリカシーのない人」と妻がふくれています／修復には時間がかかりそうです。

ふだんの言葉遣いをベースにした話し口調で、おもしろい味のある詩に仕上がっている。しかもみごとな起承転結の四連構成だ。この作品のように、定年退職という年齢にさしかかって、ふと立ち止まり、それまでの人生や、妻との日常を見つめ直して見えてきた小さな発見やおどろきを詩にしている。野口さんの詩の魅力は、先ほど言ったように、ふだんの話し言葉で書き、詩の対象を自分とその周辺にしぼって、きちんと詩を組み立てていること。それに生来の人柄だろうが、他人を慮る気質からくるユーモアと、おもしろがらせてやろうというサービス精神が嫌味なくあふれていること。そして何より、自分を突き放して見つめる批評精神がしっかり備わっていることだ。

尾崎美紀『出發はいつも』(空とぶキリン社)は、彼女のこれまでの詩集から飛躍的に詩の広がりや深さの両方でその魅力を増した好評詩集だ。難しい言葉はどこにもない。だれにでもわかる言葉を使って、だれにでもわかる詩を——という彼女の詩のスタンスは少しも変わらない。そのうえ今度の詩集では、それぞれの詩の言葉に込められた思いに、おのずと読み手が深くうなずき、しばらくそれを心にとめておきたくなるような気持ちにさせられる。読み手が詩と対話する、あるいは、読み手が彼女の詩を鏡面として自分の心の内をうつつしてみる、というような気持ちにさせられる。いい詩がいくつも並んでいるのだが、そのなかの一篇。「そこにいた」。

「大切な人を失うと／心がひびわられて／ひりひりするの／いなくなってしまうからではない／そこに／ついでこの間までいたからだ／そしてそれを／覚えて／いるからだ／いなくなってしまうた人を探して／私たちは空を見上げる／雲に星に／覚えて／いる人の姿を／一筆書きで確認する／いたこと／そこに いたこと／ついでこの間まで／それを忘れないために」

あとがきを読んでいて、ふと次の一節に目にとまった。「前の詩集を出してから十四年が経った。その間に、何人もの大切な人を失い、その度に言葉が易しくなっていくのを実感した。」なお、この詩集は惜しくも受賞には至らなかったが、今年度の富田碎花賞の候補詩集の一冊にノミネートされていた。

水こし町子『いくつもの月』(砂子屋書房)は、半さんの会文化賞を受けた前詩集に続く第七詩集。水こしさんもまた、震災の記憶を深く自らの詩の奥に据えて詩を書いている。「隠れている瓦礫」などは直接震災の記憶が詩のモチーフになっているが、どの作品にも、見えないところで震災の影響を深く受け止めているようなところが見られる。というのも、作品の中に「逃げる」とか「追いかける」というイメージがよく出てくる。それは「十六年前の大震災の時／二羽の鳥と私は逃げた」(「逃げる」)という震災体験の時のみならず、「椿町三丁目」で、名古屋大空襲のおりに、母が、私を乗せた乳母車の上に布団を被せて逃げた話が出てきたり、また、逆に、幼い頃に名古屋で「母が先に踏切を渡ってしまった」とき、電車が通過するのを心細く待っていた体験から今も「踏切を走って渡る」といった「一丁目一番地」の彼女の行動も、震災の記憶とリンクしているだろう。そうやってみてくると、さらにそこから「遠ざかる」というイメージの連鎖を通して、「別れ」や「喪失」というモチーフが、この詩集の通奏低音として深く響いていることに気づく。

長尾佳枝『ばら ササユリ』(編集工房ノア)は、言葉の端正な立ち姿が際立つ。

特に、「からだ」と「こころ」など、冒頭の《身体詩編》や、「種」や「玉葱」などを扱った《植物詩編》に見られるように、「《かたち》を見つめ、そこから見えなもののや、そこに隠れているものを取り出す言葉の手際の鮮やかさ。例えば「無花果」という作品。「ほかにどうあろうと／花は実の内側に咲いて実りと一体になった／いとしい実のために花を内側に閉ざした程の／日々の厚み／(略)／だが遠く実を充たす乳のしたたり／母性の凡庸を／どっしりと生き切つてうたがわぬその逞しさ(略)」

無花果の実のかたちに、母性の逞しさを見いだすその感性と、それを持ち重りのするずしりとした無花

果の重量感さえ伝わってくる言葉に変換して差し出す技量なものだ。「形象詩集」とでも呼びたいような円熟の詩集と言えよう。もう一篇、「ひまわり」の一部を引用する。炎の輪だった夏のみまわりが、秋には大きく花の姿をかえる。「まるで銅鏡で／パツと蓋をするかのように／秋／花はとじられて／静かになつていようように見える／燃えつきたように疲れて／種で鋳を打たれたようにうつむく」

玉井洋子『蠶る』(澤標)は、「つちふる」と読む。俳句では春の季語だが、「吹き上げられた土や砂が降る」こと。第一詩集『震える』から数えて19年経つという第二詩集。冒頭の「風化」がすばらしい。

「アスファルトに／お椀が／ひとつ／降ってきて／濡れてきて／何日もそのままに／霰うけ／砂埃あび／未明／巨竜が卵を生んだ／地面から建物がつく／くり剥ぎ取られ／ガレキとともにひとと消えた／ダンブが道々落としていった／遺失物／もう誰の／掌に載ることもなくなった／木の器／天にむかって／ひらかれる／円／アペリアの根方に／色さびてゆく／それはまだ／椀と呼んであげられる／ほどの／風化」

どこかの家の食卓に毎日あって、誰かの掌に載り、その周りには家族のにぎわいがあったに違いない。そんなお椀が、ガレキを運んでいたダンブからこぼれ落ちて道にあるのを見つけた。「天にむかってひらかれる／円」というのは、すでに椀という人の器物から、その記憶が拭かれて、抽象性をおびた無機的なモノへとかわっていくのをとらえた表現だ。その時間の流れに玉井さんは異議を唱えているのだ。「それはまだ／椀と呼んであげられる／ほどの／風化」という最終連のフレーズの止め方は秀逸。道に落ちたお椀が抱えている人や家族の無念を風化させてはいけないう強いメッセージが、この一篇にぎゅっと詰まっている。阪神淡路大震災が自分の詩の原点であることは、20年経っても変わらない、という玉井さんの意志表明がはつきりと読み取れる。また、表現において特徴的なのは、絵画的、あるいは視覚的なイメージの大胆な処理の仕方と、時おり混じる緩んだ言い回しが、詩の世界を息づかせ、読み手の心に自然にはいつていく親しみふかさを添えている。

中堂けいこ『ニューシズンズ』(思潮社)の冒頭の

「とりのうた」から引く。

「いつのまにかみぞおちに／カナリアを飼っている／ときおり腹部が熱くなるのは／カナリアがうたいが／ついているからだ／うたをわすれたわけではないので／わたしにしか聞こえない透明な声で鳴く／つきぬけるような響きにさそわれ／わたしはふかい谷におりていく」

まさにこれは中堂さんの、詩を紡ぐ無垢な信条告白のような序詩。不条理な世界を描いても、どこか明るく、言葉のリズムと、シュールなイメージが編み上げる詩の空間は、読んでいて心地よい。特に注目したのは、最後の章にある「よりてかみ」や「みみ流れ」「とりめくも」といった意味不明のことをばを巡る魅惑的な諸編。

「頭がちりぢりになる よりてかみよりてかみ ああ濁音がほしいと雨乞いをするが わたしは動物を四角にたたまねばならない 四角い箱にしまわねばならない／雨のしたたるよりてかみの納屋はばあちゃんの桐箆筒が二棹たてこんで そのすきまに箱をつみあげる ああ濁音がほしい 動く物にすぎないとわたしたちの夕食に供される動く物は臍腑にたどりつくのだが ことごとくおしなべて箱のかたちに押し込められる 納屋の長持の引き戸をひらくと四角にたたまれたばあちゃんのはあちゃんが膝をかかえて笑っている(略)」（よりてかみ）

この意味不明の「よりてかみ」なるもの、カフカの「オドラテク」をふと思わせるが、おそらく中堂に尋ねても、「よりてかみ」と呼ぶしかないものと返ってくるだろう。存在よりも先に言葉が先行する。ただし、詩というものの根源がそこに潜んでいるような気がする。言葉を折り、畳み、開き、また折り、畳みするうちに、知らず、おのれ自身が言葉に畳まれてしまうナセンスこそ、究極の詩の姿である。

☆兵庫県現代詩協会会員の詩集・エッセイなどの書籍が、意欲的に出版されています。それらは注目を浴び、素晴らしい成果をあげておられます。読書会、詩のフェスタひょうご、ポエム&アートコレクション、文学紀行、総会などの兵庫県現代詩協行事への参加は、新たな詩作の発見をうながしてくれるように思えます。

(O.T)

◆第十二回読書会

「平田俊子の詩について」

二〇一七年七月二十九日 私学会館

チューター 野田 かおり

連日の記録的猛暑の中、三十五名の出席でした。冒頭、チューターの野田さんは、自分と詩の書き方の違う人の詩を読んでみたかったと率直に立場を表明。

まずその詩について。平田自身が「言葉遊びや笑いのある詩を大事にしたい……その上で単なる遊びで終わらないような心(しん)の強さも持ち合わせたい」と語っていることが紹介された。そして『詩、つてなに?』(小学館S.I.ムック)をテキストに、ウーロン茶↓チャーリーチャップリン↓ラ・マンチャの男、と茶の響きから連想を拡げていく詩法を例に、連想を構造的に組み立てながら詩を書いていく手法を紹介。まさに言葉遊びながらその心(しん)の強さを展開していく良い例だと思った。また詩という小さな容れ物にはテーマを絞って掘り下げていくことが大切であること、詩を決めるには名詞が大きな役割を負っていると思っていると平田は丁寧に語っている。

野田さんは、1988年の『(お) もろい夫婦』あたりから実体験を題材に、その詩法を変化させていったと述べている。そして2015年の『戯れ言の自由』を中心に話された。岡井隆の「面白くて笑いながら読んでいるうちに、だんだん、詩集の奥まで読むときには、すっかり真顔になってあるという、タネも仕掛けもある詩集である」という評をひいて、現実が感じられない点から詩を書くこととしていくと強く感じたと述べている。中には戦争の記憶とダイレクトに結びついた詩もあって、社会性を言葉の問題として取り組もうとした立場を、岡井隆との対談で平田自身が語っている。「言葉が自由に呼吸しているというか、言葉や発想の自由さを活かした詩を書きたいとずつと思っています。…自分の中に一旦沈めて、時間が経ったあとで……どこかで意識して書くくらいの方が自由度の

高い詩ができるんじゃないかな」と。その言葉には世界に対する自分との距離の取り方をきつちり考えて表現の問題にしていくな態度がよく現れていると思う。野田さんは、始めは何でこんなにダジャレが多いのかと思ったが、再読するたびに重たい詩だと思おうようになったと述べている。

やはりレジメの中にある「詩にはいろんなタイプがあります。…自分の性格や好みや生理や考え方に合う詩を書いていけばいいのです。」という平田自身の言葉。当たり前といえど当たり前ともいえる詩への対し方だが、そこにはむしろ毅然と、女性性を越えて自分ということで書いて来たという心(しん)の強みが見えるように思った。

チューターの報告の後、「言葉のはずし方、あるいは転がし方のうまさ」「個人的体験を題材としながらあくまで表現上の問題として書く姿勢」「あり得ない不条理の世界を言葉で実現してしまう手法」「社会への対し方と表現の問題」「詩あるいは言葉の自由度とは?」などそれぞれの問題意識からの発言が為された。中で「落下」という詩をあげて、終わり三行をどう読むかで、詩の印象や意味が変わってくる、という指摘があり、どう読むかは読み手の詩や社会への問題意識の現れでもあると実感。

私は事前の読書で必ずしも平田詩を楽しめなかったが、言葉のリズムがすっかりあって、そのリズムに乗ることでようやく読める感じがあった。今回のレポートを聞いて、その詩への対し方が見えてきたとき、各自にあう詩を書けばよい(読めばよい)との言に領いた上で、違和感を持った詩をも受け入れて読める、柔らかさを持ちたいものだと思った。

10月《詩のフェスタひょうご》の講演会のタイトルは「詩を書く時間―言葉をこころがす、言葉に「つまづく」である。意味性が重視されがちな現代詩をもう少し言葉と遊びたい、言葉で遊びたいという思いから書いていこうとその領域を拡げる仕事をされている平田さん。さてご本人からどんなお話がきけるだろう。

(黒住 考子)

◆会員の発行書

2017年6月〜2017年11月

瑞木よう詩集『桜の空』竹林館 ※5月前号
 西村好子詩集『此岸の船』 ユニウス
 水こし町子詩集『いくつもの月』 砂子屋書房
 寺沢京子エッセイ評論集『平和の橋』 竹林館
 長尾佳枝詩集『ばら ササユリ』 編集工房ノア
 関はるみエッセイ集『黒き猫』 コントラルト文庫
 玉井洋子詩集『蠶る』 濤標
 中堂けいこ詩集『ニューシーズンズ』 思潮社
 あだちかつとし詩集『記憶』 私家版
 和比古詩集『人間の構図』 ユニウス
 渡辺兼直詩集『唄う浮世絵』 編集工房ノア

◆会員の詩誌

2017年6月〜2017年11月

アリゼ179〜181号(以倉紘平)
 多島海32号(江口節)
 Messier 0号記念(香山雅代)
 ア・テンポ52号(玉井洋子)
 めらんじゅ富哲世追悼特別号(大橋愛由等)
 月刊めらんじゅ125〜128号(大橋愛由等)
 Poetry Eging 37・37-1・38(寺田操)
 プラタナス62号(玉川侑香)
 ガーネット82〜83号(神尾和寿)
 えくり7月号(高谷和幸)
 鳥72号(足立勝歳)
 どうるかまら22号(北岡武司)
 鶴鶴8(江口節)
 花筏31号(住吉千代美・遠藤昭巳)
 まほろば42号(たかはらおさむ)
 河口から田(季村敏夫)
 唯7号(紫野京子)
 現代詩神戸258号(永井ますみ)
 別嬢104号(高橋夏男)
 播磨灘詩話会30年誌(加古川 播磨灘詩話会)
 木想7号(高橋富美子)
 時刻表2号(たかとう匡子)
 Contraltos 8号(坂東里美)

◆常任理事会報告

■六月十一日第二回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。ポエム&アートコレクション、展示変更点の検討。開催日時・時間の縮小と参加費の徴収など。講演は「竹中郁について」たかとう匡子。今回コンサートは行わない。HP立ち上げを検討。協会行事などを案内、掲載する予定。

■七月十五日第三回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。年間事業について。七月二十九日読書会は、取り上げる詩人「平田俊子」チューター・野田かおり。十月八日「詩のフェスタひょうご」について詳細確認。平田俊子氏講演演題「詩を書く時間 言葉をころがす、言葉につまづく」ポエム&アートコレクションのチラシ検討。文学紀行は三月十八日、須磨寺など平家物語を巡る旅に決定。総会後の常任理事会について意見があり検討。

■九月十八日第四回常任理事会、私学会館にて。台風のため日に変更、常任理事九名出席。読書会報告、参加者二十五名。次回読書会は十二月二日、取り上げる詩人「黒田三郎」チューター・野口幸雄。ポエム&アートコレクション出品者数、チラシなど確認。文学紀行下見は九月末に。

■十一月三日第五回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。年間事業報告。ホームページ担当大橋・北野両氏より立ち上げについての報告。ポエム&アートコレクション展の搬入搬出、イベント、当番表、補助金、後援等の検討確認。文学紀行の下見は九月三日実施、報告を受けて内容検討後に決定。「詩のフェスタ」の報告。(現在会員数一四五名)
 (尾崎 美紀)

◆来年度第二十二回総会の日程、五月六日(日)一三時より。会場は西宮市民会館五〇一号室で決定。総会後の懇親会の会場は検討中。総会での講演は、大橋愛由等氏、演題等の内容は今後に発表予定。
 ・次回常任理事会は二月四日。
 ・次々回常任理事会は四月一五日。

◆事務局より

会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。詩に関するイベント等の案内もよろしく願います。会員の動静の連絡もお教えください。

◆会計より

今年度会費を未納の方は振込用紙にて速やかにお納めください。
 年会費は4000円です。
 郵便振替口座00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会

お忘れのないようよろしくお願いいたします。

前年度まで未納の方も速やかに納入お願いします。

◆会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。
 会報担当は大西隆志です。どうぞよろしくお願いいたします。
 大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿3-1-9-702

メールアドレス furadou@extra.ocn.ne.jp

(フリダウカゴ) furadou.t@gmail.com

◆新入会員をご紹介ください

新入会員をご紹介下さい。詩人を志す方、詩に興味のある方は是非兵庫県現代詩協会へご入会下さい。担当の尾崎美紀・神田さよまでお知らせ下さい。また住所変更、退会の会員は事務局までご連絡下さい

連絡先 入退会担当 尾崎美紀

事務局 神田さよ

◇他団体の著書

三重県詩人集25号(三重県詩人クラブ)
 埼玉詩集第17集(埼玉詩人会)
 福島県現代詩集2017(福島県現代詩人会)
 栃木県現代詩年鑑2017(栃木県現代詩人会)

◇他団体の会報・詩誌

いちご通信17号(大分県詩人連盟)

福島県現代詩人会会報115号(太田隆夫福島県現代詩人会)

島根県詩人連合会会報82号(島根県詩人連合)

長野県詩人協会会報135号(長野県詩人協会)

いしかわ詩人44号(石川詩人会)

兵庫県歌人クラブ会報197号(兵庫県歌人クラブ)

安藤直彦)

山形県詩人会会報32号(山形県詩人会 事務局松田達男)

中日詩人会会報189号から190号(中日詩人会 事務局宇佐美孝二)

福井県詩人懇話会会報95(福井県詩人懇話会事務局 千葉晃弘)

すずかけ361号〜365号(兵庫県芸術文化協会)

群馬詩人クラブ会報301号・302号(群馬詩人クラブ)

岡山県詩人協会だより20号・21号(岡山県詩人協会)

とつとり詩人36号(鳥取県現代詩人協会 池澤眞一)

宮城県詩人会会報25号(宮城県詩人会 竹内英典)

大分県詩人協会会報149号(大分県詩人協会事務局 工藤和信)

秋田県現代詩人協会会報56号(秋田県詩人協会)

岐阜県詩人会会報9号(岐阜県詩人会 井手ひとみ)

日本現代詩人会会報147号(日本現代詩人会)

関西詩人協会会報86・87号(関西詩人協会)

茨城県詩人協会会報24号(茨木健詩人協会)

高知詩の会通信17号(高知詩の会 林嗣夫)

詩の会40号(宮崎県詩の会会報 碓山加奈)

埼玉詩人会会報84号(埼玉詩人会)

福井県詩人懇話会会報96岡崎純追悼号(福井県詩人懇話会 事務局千葉晃弘)

長野県詩人協会会報136号(長野県詩人協会 事務局赤羽浩美)

◇会員の動静

・たかとう匡子

富田碎花旧居開館30周年記念事業で、詩人谷川俊太郎を招いての「富田碎花と谷崎潤一郎」において、「富田碎花・詩とリズム」を講演。10月1日芦屋市民センター ルナ・ホール。

・江口節
 (社)日本詩人クラブ理事(関西大会担当)に就任。
 2期目・2017年6月〜2019年5月。

・野口幸雄

詩集『妻が出かけた日』出版記念会。7月22日14時から。メリケン船客待合所「メリケン亭」。

・永井ますみ

「詩朗読きやらばんで出会った詩人たちNo.3」岡隆夫」10月22日 神戸ラッセ・ホール。

・玉井洋子

詩集『蠶る』出版を祝う会。11月5日12時から。中華料理店「香港香港」。

・玉川侑香

神戸塾火曜サロン「父たちの戦争」、南輝子、所薫子と鼎談。11月14日ギャラリー島田。

・季村敏夫

京都四条富小路徳正寺での「百年のわたくし・巻二」11月23日、ポエトリーリーディング。

・神戸塾火曜サロン

「食と戦争と記憶」パンと野イチゴ、山崎佳代子と対談。11月28日ギャラリー島田。

◇入会

・芝崎修平 〒641-0022 和歌山県和歌山市和歌浦南

3-5-19-203

・北山幸子 〒651-0056 神戸市中央区熊内町1-5

1-2

電話078(242)3706 所属「風の音」
 著書に『独言(ひとりごと)』『海の見える街から』

・山中幸義 〒673-0883 明石市中崎2-4-402
 電話078(913)9701

元・明石ペンクラブ事務局長

・山本彰子 〒666-0115 川西市向陽台1-1-7
 電話078(744)9701 所属「小手鞠」

◇退会

・田中敏弘

・時安喜子

・井口幻太郎

・吉田草平

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ
 〒663-8006 西宮市段上町6-14-4

電話 0798(53)0686

★会計／野口幸雄

〒567-0846 神戸市灘区岩屋北町

4-4-5-902

★会報編集／大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿3丁目1番9の702

★印刷所／社会福祉法人 新生会 新生会作業所

〒663-8006 西宮市染殿段町2の11